



小笠原の2, 3 移入樹の盛衰について

奥 富 清 (当基金理事長)

先日(01年10月)、久しぶりに小笠原を訪れた。そこで目を奪われたのは、母島の常緑広葉樹林内でのアカギ(トウダイグサ科の常緑広葉高木)の著しい繁茂であった。とくに桑の木山保護林では、20数年前に私たちが調査したときには優勢であったウドノキーシマホルトノキ自然林の一部が、アカギの繁茂によって既にアカギ林とよべるような林になっていた。他の場所でも至るところでアカギの稚樹がみられ、アカギが急速に母島の自然林内に拡がっていることが窺えた。

アカギは明治38(1905)年頃、琉球から小笠原の父島や母島に薪炭材用に移入され、植栽され始めた樹木である。成長して生じた多くの種子は、その林や隣の林に落下するばかりでなく、鳥によって離れたところにも運ばれ、徐々に分布域を拡げたものだ。

ギンネム(マメ科の落葉低木~小高木)もまた、移入種である。熱帯アメリカ原産で、明治12(1879)年頃インドから小笠原に移入されたと言われている。路傍、住居の跡地、伐開地などの向陽地に群生するほか、崩壊地のような瘠悪な土地を生態的最適域として大群生し、そこを被いつくしている。トーチカなどのカムフラージュのため植えられ、また激戦地となって土地の攪乱が激しかった硫黄島では、ギンネム林が島の半分近くを被い、とくに摺鉢山はほぼ全山ギンネム林であった。これは20数年前の調査時の状況なので断定はできないが、密生して他の植物をほとんど寄せつけないギンネム林のことなので、その優占はおそらくいまあまり変わってはいないと思われる。一方、ギンネムは好陽性の植物なので、林内が暗い常緑広葉樹林への侵入はほとんどないようだ。

小笠原のもう一つの主要な移入樹にリュウキュウマツがある。その名のとおりに琉球から明治32(1899)年に移入された樹である。その人工林から、大戦末期に生じた多くの耕作放棄地を主とした空き地に入ってアカマツ二次林となり、1980年前後には小笠原の二次林中、最大の面積を占めていた。しかしその頃から、このリュウキュウマツ林に激変が起こった。当時、日本内地で猛威をふるっていたマツノザイセンチュウが小笠原にも侵入し、ほとんどのリュウキュウマツを枯らしてしまったのだ。そのため、小笠原では現在、リュウキュウマツの大きな林を見ることは難しい。

以上みてきたように、小笠原の主要な移入樹種であるアカギ、ギンネム、リュウキュウマツの3種は、いずれも明治に移入された植物であって、小笠原での分布生育歴はそれぞれ1世紀前後で大差はない。そして、はじめはともに何らかの利用目的をもって移入されたものだが、それらは戦後、いずれも広く利用されてはおらず、樹林は放置に近い状況にあったようだ。それにもかかわらず、ここ約20年間に、リュウキュウマツは隆盛から極端な衰退化、ギンネムは隆盛なままほぼ横遣い、アカギは急速な隆盛化というように、これらの樹種間にはその消長に大きな違いが生じている。

これらの違いは、それらの樹木の特性とそれを取りまく諸々の要因、例えば気象や土壌等の立地要因、競争あるいは共存相手、天敵、花粉媒介者、種子運搬者、人為(主に利用)等々との関係、さらにはそれらの相互関係によって進行した生態的ドラマの違いである。

これら生態的ドラマの筋書きの詳しい検証と比較から、今後各地で、そのフロラにない植物を移入する際に検討すべき多くの課題が、浮かび上がってくるものと思われる。

(注: 移入時期については豊島1938、豊田1981による)

平成13年度助成事業報告

平成13年度当基金の助成総額 ^{3,047} 2,778万円

I. (財) 日本自然保護協会との共同事業による公募助成	22件	2,028万円
II. (財) 世界自然保護基金日本委員会の事業助成	4件	300万円
III. (財) 日本自然保護協会の事業助成	2件	250万円
IV. その他の助成	1件	200万円

平成13年より14年にかけて助成。(内容は下記)

助成内容

I. P. N. ファンド第12期(平成13年度)助成先一覧(別紙)

II. (財)世界自然保護基金ジャパンへの独自事業助成

- ・『市民による諫早干拓「時にアセス」』報告書の提出・普及 助成額：50万円
- ・石垣海域におけるサンゴ礁モニタリング調査 助成額：100万円
- ・干潟とその集水域および海域保全活動 助成額：100万円
- ・WWFロシア「北方四島自然保護基金」に対する助成 助成額：50万円

III. (財)日本自然保護協会の事業への独自事業助成

- ・有明海の水質・底質の富栄養化についての調査と解析 助成額：50万円
- ・やんばる地域の人と自然が共生する持続的な地域社会づくり 助成額：200万円

IV. 地球の友ジャパンの事業への独自事業助成

- ・「極東ロシア森林ホットスポット・プロジェクト」の諸活動 助成額：200万円

お知らせ

「第7回プロ・ナトゥーラ・ファンド助成成果発表会」

- 日時：2001年12月8日(土) 10:00～16:50(終了予定)
- 場所：こどもの城(8F 801～804 研修室) TEL: 03-3797-5677
- 主催：(財)自然保護助成基金・(財)日本自然保護協会
- 参加費：無料(どなたでもお気軽にご参加ください)
- お申し込み：直接会場へお越し下さい。途中参加も可能です。
- 詳細はホームページ (<http://www1.big.biglobe.ne.jp/~pronat/>) をご参照下さい。

事務局スタッフ交替

当基金開設以来の事務局長 門脇 健 および事務職員 榎木 常子が今年3月末をもって
停年退職し、新たに事務局長に多田 友和、事務職員に関 昌子が就任致しました。

P. N. ファンド第12期(平成13年度)助成先一覧

国内調査研究助成

単位:千円

No.	研究テーマ	助成先	代表者	助成額
1	在来マルハナバチ類保護のためのセイヨウオオマルハナバチの野生化状況の評価と駆除方法の開発	セイヨウオオマルハナバチ野生化問題研究グループ	横山 潤 (東北大学大学院)	1,000
2	イリオモテヤマネコの生息地としての西表島山地部の評価調査	イリオモテヤマネコ研究グループ	伊澤 雅子 (琉球大学 助教授)	1,020
3	沖縄島北東岸のサンゴ礁性貝類相の現状調査	ウルマ貝類調査グループ	黒住 耐二 (千葉県立中央博物館)	880
4	三峰川水系における帰化植物の生物学的侵入が生態系へ及ぼす影響	信大自然史研究会	大塚 久美子(信州大学農学部 助教授)	800
5	全国での堅果類の豊凶測定によるツキノワグマの出没予報システム構築の研究	日本ツキノワグマ研究所	米田 一彦 (日本ツキノワグマ研究所)	600
6	川辺川流域三世代自然ふれあい緊急調査	川辺川流域自然ふれあい調査研究会	養茂 寿太郎 (東京農業大学 教授)	700
7	外来種カミツキガメの野生化とその対策に関する研究	外来種対策委員会	小林 頼太 (東大農学生命科学研究科)	940
8	世界遺産春日山原始林と天然記念物ニホンジカの保全生態学的研究	春日山原始林研究グループ	前迫 ゆり (奈良佐保短期大学)	730
9	生態的プロセスに着目して地域の生物多様性保全を考慮する森林管理 - スギ人工林における生物間相互作用の復元 -	人工林生態系研究グループ	紙谷 智彦 (新潟大学農学部)	1,000
小計			9件	7,670

国内活動助成

1	馬毛島の自然と歴史:市民調査の成果を生かした報告書とガイドブックの作成・活用	馬毛島の自然を守る会	長野 広美	1,000
2	佐渡島における陸封型(河川型)ヤマメ <i>Oncorhynchus masou masou</i> の増殖保護と遺伝子解析調査	NPO・特定非営利活動法人 溪流再生フォーラム	飯塚 友章	840
3	藤岡のヤリタナゴ・マツカサガイの保護のためフォーラム開催とその成果の出版	ヤリタナゴ調査会	斉藤 裕也	800
4	活動する市民によるワークショップと緊急レポート「市民参加と環境教育によるワイルドライフ・リハビリテーション&レストレーション」	ふくしまワイルドライフ市民フォーラム	溝口 俊夫	800
5	小出川の環境保全と子供達への自然環境教育活動	小出川に親しむ会	丹沢 久子	500
6	第14回日本の森と自然を守る全国集会在in北海道の開催	第14回日本の森と自然を守る全国集会在in北海道実行委員会	寺島 一男	1,000
7	箕面北部開発地の市民参加環境調査と自然保護、地域づくり	箕面市北部の自然と開発を考える府民の会自然保護部会	本多 孝	400
8	小笠原諸島におけるエコツーリズムの確立	小笠原ネイチャーフォーラム	有川 美紀子	400
小計			8件	5,740

海外調査研究助成

No.	研究テーマ	所属機関	代表者・[]内推薦者	助成額
1	東アジア遺存植物宝庫としての天目山(中国)における貴重な植物群落の保護生態学的研究	華東師範大学環境科学学部【中国】	達 良俊 (Da, Liangjun) [尾崎 輝雄: 千葉県立中央博物館 研究員]	1,700
2	中国海南島における稀少動物の分布とその歴史的要因に関する研究	中国海南師範学院野生動物保護管理研究センター【中国】	李 玉春 (Li, Yuchun) [小金澤正昭: 宇都宮大学農学部附属演習林 教授]	980
3	石門台省立自然保護区におけるチョウ類の生物多様性と保全に関する研究(中国)	華南農業大学昆虫生態学教室【中国】	王 敏 (Wang Min) [矢田 脩: 九州大学大学院比較社会文化研究院教授]	1,400
4	スマトラ西部州(インドネシア)におけるアゲハチョウ類の生活史と生態	アンダラス(Andalas)大学理学部【インドネシア】	ダヘルミ (Mr. Dahelmi) [中村 浩二: 金沢大学理学部生態学研究室 教授]	950
5	インドネシア産哺乳類・鳥類のDNAバンク設立のための継続的努力	インドネシア科学院生物学研究センター動物学部門【インドネシア】	スリ・スランダリ(Dr.S Sulandari)[東 正剛: 北大大学院地球環境科学研究科 教授]	1,840
小計			5件	6,870

助成金総額		合計	22件	20,280
-------	--	----	-----	--------

平成12年度決算ならびに平成13年度予算

当基金では平成13年5月14日に第17回理事・評議員会を開催し、平成12年度の事業報告、決算報告及び平成13年度の事業計画、収支予算案が承認されました。決算と予算は下表の通りです。

平成12年度決算ならびに平成13年度予算

(単位：千円)

項 目	平成12年度		平成13年度
	予 算	決 算	予 算
(収入の部)			
基本財産運用収入	43,795	43,717	44,000
運用財産収入等	35	1,119	550
前期繰越金	22,766	22,766	22,462
収入合計	66,596	67,602	67,012
(支出の部)			
事業費	30,000	30,148	32,000
活動助成	(8,000)	(12,660)	(8,000)
調査研究助成	(14,000)	(7,700)	(15,000)
海外調査研究助成	(7,000)	(8,960)	(8,000)
事業管理費	(1,000)	(828)	(1,000)
管理費等	15,000	14,992	15,890
次期繰越金	21,596	22,462	19,122
支出合計	66,596	67,602	67,012

囲碁余談



事務局長 多田 友和

私は囲碁(四段)を嗜む。読みの甘いザル碁党に多少毛の生えた程度の力量であります。

19路盤の世界に自由な発想で石を並べて行く、いと楽し。

但し、交互に石を打つゲームの為、自分の思惑通りには行かない。勝ちパターンに入っていないながら、ヒョイと悪い手を打ってしまう。その石の顔を立てんが為にズルズルと深みにはまり、いずれ敗戦への道を迎ることになる。

地球の自然界に於いてもしかり、必要でもない空港・道路・ダム建設・諫早干拓問題等、自然破壊を伴う悪い手を打ってしまうと思わぬシッペ返しをくらい敗戦へと引きずり込まれてしまう。

自然を大切に保護して行くことに微力をつくしたいと思っています。

編集後記

新しい世紀に入って少しは良い環境になるかと思っただのは全く甘い考えでした。自然のみならず人間にもひどい事態が起こりました。これも皆人々の心の物事に対する優しさが欠けていることから始まっているのではないかと考えられます。

毎年来年こそはと期待を込めて後記を書いているのですが、何時になったら夢が叶うのでしょうか。でも諦めずに一步一步前進しなければなりません。

ほんとうに来年こそは良い年になりますように。

記 岡本 和子

Pro Natura ニュース 第11号

発行者：財団法人 自然保護助成基金

発行年月日：平成13年11月20日

〒150-0046

東京都渋谷区松濤 1-25-8

松濤ネクス 2階

TEL:03-5454-1789 FAX:03-5454-2838

E-mail:pro-natura@mj.biglobe.ne.jp

http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/